



# 朱璽と鯨



浅井健一

男根を切り落とされたようだ。

逃げていく男の股間からは血が溢れていた。それだけで、尋常ではないことが起きたと分かる。偶然擦れ違った古瀬丸は、男の発情した加古鳥よりも酷い声に耳を塞いだ。夜ならば目が覚め、昼であれば漁に出た舟が帰ってくる、そのような声だった。

砂利の浜辺に建つ小屋から男は転がり出た。古瀬丸は男の後ろ姿を見て、遠からず死ぬのではないかと思った。男根を失っては、邑では生きていけないだろう。古瀬丸は男の昨日までの意気軒昂とした姿と、あの萎んでいく姿を頭で繋げようとしたが、上手くはいかなかった。男が死ねば、古瀬丸にとって二度目になる。

夏前の、空気の澁みが激しい季節。曇り空と鈍色の空、風も波も優しくはない。小屋のほうを振り返ると女が佇んでいた。浜辺の小屋は「海津屋」と言い、祭事にのみ使われる。その小屋に女がいることに古瀬丸は驚いた。墨を溶かしたような黒衣を纏い、神巫女の貝腕輪や石飾りを身に着けている。左手に持った青銅製の逆剣には、切断された男根が突き刺さっていたが、表情には嫌悪も恐怖もない。

妖艶な、と都府の者なら言い表すだろう。美しい顔立ちと化粧のもたらす色香に、古瀬丸の警戒心が和らぎそうになった。あれは大王の使者だ。大人たちが話していた「壘師様」、それだと気付く。

「ちんこ」

「そうだよ、坊や。魚の餌にしておやり」

女は微笑むと、逆剣を振るって古瀬丸の足下に放った。

「壘師様」

「良く知っているね」

「大人が話していた。大王の使者が来ると。それは壘師様と言うらしい。でも、壘師様が女だとは思わなかった。女はその小屋にいては駄目だ」

「女は駄目なのかい」

古瀬丸は頷いた。

「だが、代々の壘師は那岐邑で役目を果たしてきた。大王の意を受けた者を、男が犯そうとするなど前代未聞のこと。古来からのしきたりを忘れてるのは、邑のほうではないのか」

壘師の言葉に古瀬丸は黙ってしまう。

那岐邑は漁民が細々と暮らしているだけの集落だった。海原に繰り出し漁を営む集落は、那岐邑の他に三十を数えたが、大王の使者が訪れるのは他にない。何十年か何百年かに一度、「壘師」と呼ばれる者が大王の命を受けて那岐邑に来る。だが、百年前に訪れた時を最後に壘師の来訪は途切れ、記憶を有した者はみな死んだ。

昔語りだと誰もが思っていたが、その壘師が現れたのは昨日のことだった。衛士が担ぐ輿に乗り、壘師は漆黒の衣、恐ろしげな仮面と竹で編んだ笠という異形の出で立ちをしていた。呪いにより災いを為す鬼道師の姿。邑人の多くが忌み事のように住居に閉じ籠もる中、長老と数人の

男だけが彼らを砂利浜の小屋へと案内した。砂利浜の小屋は邑人にとって海神の住まいである。そこに璽師は籠もり、衛士はしきたりに従い邑を出た。

璽師が女であると知れたのは、つい数刻前のことだ。覗き見た者がいたのだろう。怪異な仮面の裏に、都府の女の顔があると知って男たちは色めきたった。大王の使者であっても女は女であり、女は男よりも卑しい存在だったので、男たちが璽師を犯す相談をはじめた。魚と女は叩けば大人しくなるから、無理矢理押し入り立ち替わり犯せばいい。璽師の肌を想像して順序を言い争う男たちを長老は黙認していた。長い年月が君臣の境を薄れさせたか、それとも那岐邑を乱す女に悪意を抱いたからか。

第一に選ばれたのは、邑で最も体躯の大きな男だった。漁の腕も良く、腕力と声の大きさと、長老の息子を常に圧倒していた。酒の勢いもあってか、彼はさっそく行動したようだ。だが、小屋に押し入り女に襲いかかろうとした瞬間、剣が股を貫いていた。

後は古瀬丸が見たままだ。

男根を拾った古瀬丸に、女が問い掛ける。

「坊やは幾つだ」

「十か九」

「名前は何という」

「古瀬丸」

「そう。では古瀬丸、長老を呼んできてちょうだい」

有無を言わせない口調に、古瀬丸は長老の元へと走らされた。

逃げた男の血と尿の跡を追う。古瀬丸は邑人が集まる広場に辿り着いたが、そこで人の声とは掛け離れた叫びを聞いて身震いした。血まみれの男を皆が無言で囲むのは、雲が沈む空気の下では恐ろしげな光景に映る。邑人が見ているものを、苦しみのあまり男が身体を曲げたまま痙攣しているのを、古瀬丸は共有した。痙攣は死が近い証拠だ。古瀬丸はそれを知っていた。

助からない。だから誰も、あえて手を出そうとはしなかった。哀れとは思っても、死の穢れを被ることは何にも増して恐ろしい。

邑人の中に長老を見つけた古瀬丸は、その手を掴んだ。

璽師様が呼んでいる。

長老の顔が硬直した。触れることを避けるために、瀕死の男に網が被せられる。死者を弔うための喪屋か、傷の平癒を願うための草屋のどちらに男を運ぶかは、長老が決めることだったが何も言おうとしないので、男たちは互いに穢れや祟りのことを囁きはじめた。璽師の意図を誰も推し測れないようだ。女が男を殺傷するなど、那岐邑ではあるはずのない出来事だからだ。

「海様が怒る」

その言葉に長老は反応した。

「言うでない」

「しかし、女が男を刃で刺すなど、あってはならないことだ。早く手を打たねば、海様に知られどのような災いが」

「この天気も、海様が女を嫌っているからでは」

「大王の使者は海様を知らんのじゃ」

邑人の不安が、女への敵意に変わるのに時間は必要ないようだ。那岐邑のように大王の都府から遠いと、人は君主の徳よりも神霊への畏怖に流されやすい。そして長老は邑人を宥めようとしつつも、壘師の側に立って鎮めるつもりがなかった。忌み事と女への蔑みを一通り聞いた長老は、邑人を引き連れて海津屋に向かうことにした。

大王の使者に対する作法として、膝を折り、砂に額を擦りつける。しかし、他の者は立ったままだ。

「参りました」

小屋の中から声がする。

「騒々しい」

「皆、海様と壘師様を恐れております」

「海様とは海のことか」

「はい」

「海を人のように扱っても、人のようには御せまい」

「それは」

「意に沿わない者を害すのは、海も大王も同じであるぞ」

女が現れる。

長老はまだどうにでもなると考えていた。男たちは契機があれば復讐心と欲望を満たそうとするだろうし、壘師は一人、しかも女だった。だが、小屋から現れた壘師は仮面を被り、邑人を前に何の躊躇もなく長老の白髪頭を踏みつけた。男たちの顔に動揺が走り、古瀬丸には目の前で展開されていることが理解できなかった。邑の長老が女に踏まれるなど、人が魚に釣り落とされる以上のものだ。信じがたい壘師の行為に男たちは激発するかと思ったが、真逆の力が働いた。

壘師の肌は日を知らないかのように白い。それなのに、背だけは誰よりも高かった。誰も身動きしないのは、穢れや崇りを忌む心を壘師の怪異な姿が捉えて離さないからだ。それは長老も同じだった。頭を踏まれ、顔面を砂で汚したまま、汗だけが滴り落ちている。

女は波音に似た抑揚で、長老に言葉を下した。

「あの男は天津罪を犯した。よって助けを禁ず。野へ捨てておけ」

「はい」

「名は何という」

「那岐邑の長老、餌彌彦と申します」

「そう。では餌彌彦に告ぐ。那岐邑が大王の意を忘れしを断ず。なおかつ大王の祭事を邪魔するなど、九族を誅しても償えぬと知れ。餌彌彦は汚彦と名を変えて、死ぬ」

女を犯すことが罪と、それも極刑に値すると言われ、邑人たちは息を飲んだ。

長老は声を絞った。

「なにとぞ、なにとぞ」

「汚彦、死なねば邑はないぞ」

仮面の壘師は長老の白髪頭から足を外すと、呪い言葉を呟きつつ小屋へと隠れた。身体を起こした長老は蒼白な表情で小屋を見ていたが、振り返ると邑人たちが波の引くように距離を取る。

誰ともなく恐ろしいと呟いたので、古瀬丸には何かの事情があるのだと察せられた。

邑の男たちが黙したまま櫂を手取る。璽師の呪い言葉が邑全体に及ばないため、すべきことは唯一つしかない。呆然としていた長老に櫂が振り下ろされた。一度殴れば、後は二発も三発も変わらない。男たちは自らの罪を分散するように、大きな魚を仕留める要領で、何度も打ち据えた。

長老は簡単に死んだ。

その身体に網が被せられ、喪屋へと引き摺られていく。

男らのなかで最も年上の者が、小屋の前で平伏した。

「汚彦は死にました」

「そうか」

璽師は小屋から出ると、平伏した男の頭を踏んだ。身震いし、声を出しかけた男に体重を傾けていく。この邑の者は皆、頭が高い。恐れているのは口ばかりのことではないのか、と女は言った。廻りの男たちも雷に打たれたように平伏す。璽師はそれを次々に踏んでいった。左腕に持った逆剣の先が、気紛れに男の背を傷付ける。そして砂利浜に降り、年長の男の前に立った。

「名は何という」

「玖廬と申します」

「そう。では玖廬に告ぐ。玖廬が長老となり那岐邑を治めよ」

都府の女は簡潔に言うと、小屋に戻ろうとした。その時、平伏した男の一人が顔を上げて何かを叫んだ。男は死んだ長老の長子だった。

だが、言葉が意味を持つ前に、女の逆剣が口の中に突き刺さっていた。

息が途切れるよりも早く、男の命が失われる。笛を鳴らすような声が、海鳥の鳴き声に変わり、砂の中へと埋もれていった。釣り上げた黒魚の血を抜くよりも鮮やかな剣の冴え。その手管を、平伏した男らは気配のみで察し、恐怖に震えた。

「穢れ者をこれ以上増やしたくはあるまい」

女はそう呟くと、小屋へと戻った。

「璽師様は恐ろしい御方だ」

酒を飲みながら父が愚痴るのを、古瀬丸は囲炉裏の温かさが届くか届かないかのところから見ていた。瓢箪に米と唾を入れて発酵させたものを、日が沈んでからずっと飲んでいるのだ。母は二年も前に死んでいた。古瀬丸は酒を飲む父が嫌いだ。

銚で魚を突き、あるいは海に潜り貝を獲る。そうして得た海産物を、女らは近隣の邑々に出向き米や布、生活用品などと交換した。那岐邑は漁を生業とする者の邑だが、自生した穀物や果物を集めたり、狩りに出向くこともあった。稲作はしないが、米を原料に酒を造るので、小さな米倉が一つある。米を噛み砕いて酒を造るのは女の仕事であり、男は漁業以外のことに従事することは禁じられていた。海と人との関係が「穢れる」からだ。同様に、女が漁をすることも禁じられていた。

酒は海で冷えた身体を温めるために欠かせないが、古瀬丸の父は楽しみとしてもこれを飲んで

いた。父が酒を飲み始めたのは、海に深く潜るようになって身体の節々が痛くなるためにだ。痛みを鎮めるために飲み始めた酒は、今では得た魚のほとんどを注ぎ込むまでになっていた。指や腕の震える父の姿が古瀬丸には心配でならないが、嫌いな理由は他にある。

酒は父の凶暴な一面を容易く引き出すのだ。

「丸」

父は古瀬丸を「丸」とだけ呼ぶ。

古瀬丸は「とと」と父を呼んだ。

「はい」

「壘師様は恐ろしい御方だ」

「女なのに」

古瀬丸は男が女を従えて当然だと教えられてきた。

教えたのは父だ。母が死んでからずっと、父は魚獲りや舟の漕ぎ方よりも、男と女の差を言い続けた。那岐邑は男の地位が高いものの、父ほど女を蔑む男はいない。忌み事に係わること以外に巢喰う感情があるようだが、壘師の存在は父を弱気にしていた。

酒を呷り、囲炉裏の火が染める父の赤ら顔は、怪物の洞穴にいるのと同じ思いを古瀬丸に強いた。直接的な危害に震えるのは父も子も変わりがない。変わるのは対象だけだった。女だから恐ろしい。父は囲炉裏を見詰め、母の名を呟いた。そして空になった瓢箪を古瀬丸に投げつける。

古瀬丸はそれを避けなかった。

避ければ殴られるからだ。瓢箪は古瀬丸の右肩に当たり、地面を転がる。痛みを感じないように爪を太股もに立てていて正解だった。古瀬丸が俯いたまま動かないので父は氣勢を削がれたようだ。感情をできるだけ薄めれば、身体も見えなくなるとまでは考えない。だが、泥酔した父を眠らせる最善の方法ではあった。

箆を被り、横になった父が鼾を掻きはじめのを待って、古瀬丸は動いた。

まだ夜は肌寒い。

しかし人知れず動くには良い空気だった。物音を立てないよう住居を出ると、藁葺き屋根に隠した釣り竿を担ぐ。浜辺への道は夜に閉ざされていたが、古瀬丸は確かな足取りで歩いた。樹々の覆いを抜けると月が地上と海を照らす。昼間、空を蓋した不吉な雲は、夜になって西へと流れたようだ。

古瀬丸は夜釣りをするのが習慣になっていた。父から逃れるためだったが、暗い海の波揺れに細かく反射する月光を見ていると、心が癒されるのを知った。夜の海に釣り糸を垂らし、潮音に身を委ねるのは古瀬丸の密かな楽しみだ。

海津屋は静まり返っている。寝ているのだろうかと思ったものの、男根を切り落とされた男の姿は古瀬丸の臉に焼き付いていたので、中の様子を伺う気はなかった。古瀬丸は壘師をどう見ればいいのか分からない。那岐邑を乱すのは悪いことでも、嫌いにはなれなかった。

古瀬丸が釣り場にしているのは、浜辺の横にある「男岩」という岩石だ。男岩は巨大な石の塊で、海に張り出している。砂利の浜は海に入るとすぐに深くなり、魚の世界へ行き着く。男岩

に登った古瀬丸は、駕籠を脇に置くと海の様子を見詰めた。素足は浜虫の何匹かを踏み潰していたが、あまり気にはならなかった。今日は魚が多くいそうな気配がして、胸が高鳴る。

古瀬丸は懐から男根を取り出すと、糸に括り付けて竿を振るった。

波を月が千にも分かち、黒い海に光の道を作りだしている。古瀬丸には漁民の耳が自然に備わっていた。海中を泳ぐ魚の気配を感じる力。釣りは海様の声を聞き続けることだと那岐邑の人は言うが、それは正しい例えと思う。余計なことを考えず、じっと待つのが釣りだった。

しかし、男根などが餌になるのだろうか。海様は女を嫌うから、相応しいとは思えるけれども。

糸に結ばれた男根を、魚が食らいついたのを感じ、古瀬丸は竿を引いた。強い手応えは期待を持たせたものの、釣れたのは青魚だった。青魚は那岐邑では腐魚とも言われている。死ぬと瞬間に腐るからで、古瀬丸は尾鰭を震わせる青魚を掴むと、爪で腹部を抉りハラワタを抜いた。

これで少しは長持ちする。

「釣れるのかい」

不意に話しかけられて、古瀬丸は振り向いた。

「壘師様」

「我は釣れるのかと訊いているんだよ」

「釣れます」

壘師は微笑んだ。呪者の黒衣は変わらないが、恐ろしげな仮面を被っていない。それは他人の目を気にする必要がない以上に、暗闇の中で仮面を被れば歩くところではないからだろう。男の股間を切り裂いた逆剣は腰に吊り下げ、火の灯る小壺を手を持っている。那岐邑にはないものだったので、呪いの道具と古瀬丸は思った。

油壺に布を挿したものだと言ったが、古瀬丸にはその便利さが良く分からない。火は父のいる住居を思い起こさせるので、あまり好きではなかった。女は古瀬丸の脇に立つと、釣り竿の糸が海の波間に消えるのを見詰めた。古瀬丸は女が近くにいると、魚が釣れなくなるのではと心配したが、竿から手応えが伝わった。

今度は魚も強情だ。古瀬丸は竿を持つ手に力を籠めて、餌を喰わせた魚が泳ぐ向きを変えるのを待つ。そして、魚が向きを変えて不意に力が緩んだ瞬間、一気呵成に釣り上げた。

釣れたのはゼイゴ魚だった。

「面白いように釣れるね」

「たぶん、海様の機嫌が良いんだ」

そうでなければ女がいて、魚が釣れるはずがない。

海様は嫉妬深いから女が近寄るのは駄目だ、と古瀬丸は壘師に言った。壘師は怒るでもなく微笑んだが、それは邑人が自分をどう見ているかを悟ったからだ。土地には土地神がいて、海には海神がいる。那岐邑の人々にとって海は豊漁をもたらす恵みであると同時に、荒れ狂う災いでもある。海を軽んじれば生きてはいけないと考えるのも無理のないことだ。

大王の徳が那岐邑にまで行き届いていれば、あるいは男が海津屋に押し入るということもなかっただろう。壘師が邑に遣わされるのは百年ぶりと聞いていた。それだけの時間に隔てられていれば、邑人の視線が奇異と畏怖に歪められていても不思議なことではない。

璽師は「海様」に興味を持った。

「古瀬丸は、海様を見たことがあるのか」

「どうして」

「死んだ汚彦が申ししていた。邑人らが海様を恐れていると。そこまで荒ぶる神であるならば、女の我が近寄れば狂うたように怒鳴るに違いない。だが、我には波音は波の音にしか聞こえない。あるいは、那岐邑の者だけが見える海様がいるのではと、そう考えたのだ」

「海様はいるよ」

古瀬丸は呟いた。

「見たのかい」

「見た」

糸に括り付けた男根が、魚に食い荒らされてしまった。良い餌だったが、こうなれば使い物にならない。古瀬丸は糸を外すと男根を海に投げ捨てた。これで璽師の言葉通りの「魚の餌」だ。

璽師を襲った男は草屋で一応の処置がなされたが、日が落ちる前に息絶えた。罪を犯した者を捨てておけと命じた璽師の手前、男が息絶えたのは邑にとっては好都合だったのかもしれない。那岐邑では死者を棺舟に乗せて遠くへと流す。海の果てには海様の国があり、そこへ皆帰ると信じられていたのだ。

だが、男の死体は野原に捨てられた。網を被せ、長老と同じく那岐邑の外へと引き摺ったのだ。死体に触れるのは穢れを招く行為だった。だから、極力触れないために網を使う。野原に捨てられた死体は、山犬や鳥が食うだろう。

男根だけでも海様の国に帰れば、と古瀬丸は思わずにいられない。

波音に耳を傾け、水が砂利に染みていくのを感じた。寒暖の定かではない空気が、古瀬丸の肌を撫でている。璽師は手に持った油壺を足下に置いて、古瀬丸の意に反し、側を離れないようだ。

「海様は、我にも姿を見せてくれるかい」

「分からない。邑でも見たのは数えるほどだ。日が悪ければ何も見えない」

「日が良ければ」

「海様の灯火が一面に広がるんだ」

古瀬丸は糸に骨を削った釣り針を結び、浜虫を突き刺して海に投じた。

潮風だけの時間が過ぎる。璽師は飽きずに夜の海を見詰めていた。それが古瀬丸には気味悪い。話すべきか迷い、考えるのは、男根を這う浜虫を捕まえるよりも難しかった。本当は海津屋へと帰ってほしかったが、そういう素振りを見せないで、古瀬丸は折れた。

「都府はどのようなところだ」

「都府かい。海がなく、畑もなく、山が囲み、人が多い。皆は大王の徳に従うが、悪い者もいる。呪いが流行ることもあるが、冬の次に春が来ることを心配する者はいない」

「嘘だ」

古瀬丸は笑った。

「なぜだい」

「海も畑もなく、どうして人が生きていける」

「都府には海がなくとも、ここに海があるではないか。畑もどこかにはあるだろう」

「そっか、そういうことか」

「おや、分かったのかい」

古瀬丸は鹽師が思うよりも賢い。

「大人が言っていた。海様から塩を戴いて魚を塩漬けするのは、都府に運ぶためだと。魚を運ぶのは女の仕事だから良く分からないけれど、都府で米や粟と交換したりもするよ。でも、魚が欲しいならなぜ海に行かないのだろう。塩漬けの魚なんて美味しくないのに」

「なぜだろうねえ」

鹽師は明確な答えを避けた。都府が栄えるために、漁業や耕作を営む者から富を奪っているなどと、古瀬丸に知ってほしくなかったからだ。女は鹽師の生業が、人の世に不可欠なものではないと弁えていたのだろう。

海の音を聴いた。

古瀬丸は月明かりの水面に視線を送った。

「鹽師様、海様の灯火だ」

神秘が鹽師の瞳に映る。それは言葉を失うという簡単な反応をもたらした。

海の奥深くから、青色の小さな輝きが何千万も現れたのだ。「海様の灯火」と古瀬丸が言ったもの。波に漂う何かは、蛍火を連想させた。海様を信じる古瀬丸が鹽師の顔を覗き見る。蛍のように、海中で光る生物がいるのだろうと思ったが、得難い光景であることに間違いない。

常世のものか。

星空と差のない水面の光は、枝垂れ雨。その先に灯火を飲み込む巨魁があった。

「鯨だ」

と、目を凝らした古瀬丸が声を上げる。

光の渦の直中に、島のような巨体が浮き沈みするのを、二人は見た。

「我は、あの魚を狩りに来た」

そのように、鹽師は言った。

漢儒の書物に曰く、鹽師は君主の側にあり鹽と朱を護る。

「鹽」とは王たる者が持つ印のことであり、大漢の皇帝より下賜されるものだった。大王は鹽を得て対外的な権威を臣と民に示す。鹽師は朱を携え、鹽を正しく用いるため、常に大王の側にあった。大王は詔勅によって四方四海を治めるが、その意は鹽印によって証とされるのだ。

新たな鹽が伝来すれば、鹽師は新たな朱を求める。

大漢で「朱」と、この国では「丹」と呼ばれるものは顔料だ。希少にして有毒、山深くで採掘される水銀の元が辰砂であり、それを粉状にして朱を作る。人に位があり、鹽に格があるように、大王の使う朱も鹽師の秘伝が求められた。辰砂、銀泥、香灰、呪い言葉など八十三種を練ったものを「珠」という。

鯨は珠の練成に欠かせないものだ。鹽師は自らの手で鯨を狩り、胆石と肺腑を得ることが古来

より定められていた。

鯨を狩る、と聞いて古瀬丸は目を丸くした。

「都人は鯨が何か知っているのか。島ほどもあるのだぞ」

経験豊かな漁民であっても、鯨に手を出すのは余程に困窮したときに限られている。古瀬丸は過去に一度だけ鯨を食べたことがあった。その時は、衰弱して浜辺に打ち上げられた鯨を皆で分け合ったのだ。鯨肉は固くて生臭く、美味いという程のものではない。

「鯨の肉を得ねばならないほど、都府には人が多いのか」

「肉は所望していない。邑の皆で食べるがいい」

璽師は渦巻く光と鯨の黒影を見詰めながら呟いた。

都府の人は馬鹿か。古瀬丸はそのような視線を璽師に送り、竿を置いた。海が輝くと手頃な魚が釣れなくなるからだ。千万の光に誘われて鯨が出ると、青魚などは退散する。海様が機嫌を損ねたのだろう、と古瀬丸は解釈していた。とにかく女が隣にいるとやりづらい。

邪魔だったかと璽師は問うたが、釣果はそこまで悪くない。魚が二匹ずつなら古瀬丸と父が食べる量としては十分だった。

古瀬丸は璽師を見詰めたままだ。

「どうしたのかい」

「璽師様は邑をどうしたいのだ」

璽師を恐れる者は、璽師の剣しか見ていないのだ。子供の目には、璽師は璽師であり女だった。女が海に係わるのは流神的であり、璽師の心が掴みきれない。璽師は男の股間を斬り、長老に死を命じ、長老の子を殺した。ああいうことが、まだ続くのだろうか。

心配だった。父が璽師の機嫌を損ねたら、と思うと。

「殺すのか」

「そういうことは逆に考えるといい。つまり『邑は璽師をどうしたい』と」

古瀬丸は俯いた。邑は璽師を邪魔者と思っている。

「我は璽師の務めを果たすこと以外に、那岐邑をどうしようという意図はない。ただ、邑が璽師をどう扱うかによって、我は応じているだけ。厚意であれば厚意を返そう。敵意であれば敵意を返そう」

「じゃあ、何もしなければ、何もしない」

「古瀬丸は頭が良い」

璽師は白い手を伸ばして古瀬丸の頭を撫でた。

何もしなければ、何もしない。古瀬丸にすら気付いたことを、那岐邑の者が気付いていればよいのだが。璽師が夜中に海辺を歩いていたのは、古瀬丸に会うためではなかった。危険を避けるのが目的だ。だから璽師は人気のない海へと向かい、偶然、釣りをする古瀬丸を見付けた。

大王の側にあると、人の機微が良く見える。どのような振る舞いに出れば恨みを買ひ、謀計、言葉の裏、仕草の意味を探り、先々を思案するのは衣服よりも身近なことだ。処世を誤れば死、足を踏み外さないのが都人の務めだった。例えば、怨嗟が募る邑で構えもなく寝るなど、自ら滅ぼせと主張しているようなものだ。

だから、璽師は海津屋を離れて様子を伺うことにした。

「邑の皆は壘師様を恐れている」

「恐れているのは剣であって、壘師ではなかろう。理を知らぬ愚か者ども。三人死んだだけでは、海様のほうが恐ろしいと考えているかもしれない。海様は海だから殺せないが、壘師は女だから殺せるなどと考えているやもしれない」

壘師は黙ると油壺の火を消した。

古瀬丸の手を引き男岩から降りる。そして闇夜の色濃い、茂みの中へと入った。古瀬丸には感じられなかったが、海津屋の方から物々しい気配がしたのだと壘師が囁く。

確かに海津屋の周囲には数人の男がいた。

茂みから海津屋までは五十歩の距離だったが、男たちが何をしているのかは一目瞭然だった。藁を小屋の戸口に置いて、火を点けるようだ。古瀬丸の口を塞ぐ。ここで騒がれては逃げてしまえばかりか、次の夜も警戒せねばならない。壘師はこの一部始終を見て、けりをつけるつもりだった。

海津屋に入る勇氣はないらしい。壘師を犯そうとした男の末路を思えば、あえて危ない橋は渡らないということだろう。やはり恐れは「壘師の剣」であり「壘師の呪」であり、「壘師」そのものではないのだ。

大王が那岐邑に課した役割を忘れたのも、根は同じだ。何か、壘師が軽んじられる遠因があったのだろう。だからこそ、那岐邑のような僻地であっても、力持つ者の目と手が届くということを示す必要があった。

壘師は炎に包まれた海津屋を見詰めつつ、古瀬丸に呟いた。

「今日は、もうお帰り」

口を塞いでいた手を離す。抱かれたまま古瀬丸は壘師に問い掛けた。壘師が邑人を殺すのを見たくはない。古瀬丸は壘師の腕の中で、酒気の赴くままに拳を振るう父とは、桁の違う大きさを感じていた。

炎が男らを照らしている。酒の勢いを借り、火の勢いに感情を昂ぶらせているようだが、古瀬丸は一心に「逃げろ」としか思わなかった。焼け落ちる海津屋の中にいるはずの壘師が、ここで見物している。壘師は自らを殺そうとする者を、生かしてはおかない。徳を知らない人間が暴力を用いた場合、君子であれば対話を以て誤りを正すことができるだろう。人によっては退くことで無道を通すかもしれない。だが、壘師がそうでないのは古瀬丸にも分かっていた。

それでも古瀬丸は那岐邑の人間だ。

「殺さないで」

と、懇願した。

「お前はその言葉を邑の者にも言えるのか」

優しく、喜怒哀楽で言えば楽の声色で、古瀬丸の咽を真綿で絞める。理屈に合わない教え諭しているようだ。壘師が邑人に殺されるのは仕方ないが、邑人が壘師に殺されるのは非道だと古瀬丸は考えているのか。

「そうじゃない」

「では、今から燃える小屋に走り寄って、奴らの行為を止めてみよ」

古瀬丸は俯いた。

九か十の子供には酷だったか。璽師もそれ以上は言わず、古瀬丸を腕の中から解放した。筋を通すつもりがないのであれば、今宵のことは忘れるべきだ。璽師の双眸は無言であるが故に多くを語る。古瀬丸は下唇と無力さを噛み締めて、その場から逃げていった。

「嫌われたかねえ」

一人残った璽師は溜息を吐くと、海津屋に火を点けた男らを見詰めた。那岐邑の男らに夜叉と憎まれても痛痒は感じないが、古瀬丸のような子供であれば話は別だ。ただ、璽師は璽師の役目を果たさねばならない。「さばき」と「ころし」は同じ三文字で語呂も良い。今日も明日も那岐邑は大騒ぎだ、と女は思ったが、明後日からは心安らかに務めに入れるはずだ。

一方、古瀬丸は竿と魚の入った駕籠を手に住居へと走っていた。

父は酔い潰れているはずだが、海津屋を燃やした男らに紛れていないとは言い切れなかった。もし、父がいなかったらどうしよう。古瀬丸の心臓は動悸よりも不安で一杯だった。父に璽師のこのことを話して謝ってもらおう。でも、父が謝るだろうか。女だと蔑む父が。

逸る気持ちを抑えて、竿と駕籠を隠すと、古瀬丸は住居に入った。そして安堵の溜息を吐く。父は筵にくるまって鼾を掻いていた。

父は漁の夢を見ているようだ。

丸、魚だ。魚がいるぞ。

と寝言を呟いている。

古瀬丸は少し涙ぐみながら、何もかも忘れて寝ることにした。

次の日、海津屋が焼け落ちたという知らせが那岐邑を駆け巡った。海様の祟り、と慌てた声に、父が起き上がる。古瀬丸はすでに住居の外に出て、海津屋へと向かう邑人らを見詰めていた。昨夜のことを目にした今日では、海様への怖れを口にする男らが白々しい。

「どうした、丸」

「海津屋が燃えた」

父は気怠そうな顔を一変させて、まだ火の燻っている海津屋のほうを見た。

「女は」

「生きてる」

「焼け死んだと言うとるではないか」

「でも、生きてる。璽師様は生きてるよ」

なぜ生きているのか、その理由を口にできないのがもどかしい。

父は璽師を快く思っていないから、古瀬丸の言葉に耳を貸さなかった。昨夜、父が酔い潰れていなければ、どうなっていたらろう。邑人は父の女嫌いを知っていた。海津屋に火を点けると誘い、父は二つ返事で応じたかもしれない。酒は嫌いだが、今は酒に感謝したくなる。

古瀬丸は父の腕を握ると、海津屋へと一緒に歩いた。燻る煙が海様への怖れと、璽師の死をかたちにしているようだ。新しく長老になったばかりの玖廬が、小屋を前にして祈っている。しきりに祟りを口にする男たちは、昨夜、茂みで見た者と同じだった。璽師様は自分を殺そうとした者らを殺すだろうか。

それだけが古瀬丸の気掛かりだ。

璽師は海様の祟りを受けて焼け死んだ。

そう玖廬は言った。大王の使者であろうが、海様を汚す者は海様が許さない。古瀬丸は玖廬が良く心得ているのを不思議に思った。周囲で祟り祟りと言い騒ぐ男らが、示し合わせたように視線を交わす。女が海様に係われれば、このように恐ろしい事態を招くのだ、と怖れを煽った。

「璽師は死んだ。那岐邑は海様と共にあるのだ」

「海様はお怒りになられている。このままだと魚が獲れなくなるぞ」

「恐ろしい、恐ろしい」

邑人は男女の隔たりもなく海に向かって土下座をした。璽師が近くで息を潜めていると知るの古瀬丸だけだ。古瀬丸は璽師の直線的な恐怖に萎縮していた。対照的に、自らが火を点け、海様の祟りと騒ぎながら、璽師の生きているの知らない玖廬と男たちは居丈高な態度だ。

焼け跡に璽師の死体がないと分かれば、そのような顔もしていられないだろうに。

「丸、見たか。海様は女を嫌うんじゃ」

土下座をしたまま、父は言った。

「男らしくなれ、丸」

男は璽師に太刀打ちできないくせに。子供らしく振る舞う古瀬丸は、矛盾を飲み込むことに慣れていて。怯えたように父の腕を掴み、小さく頷く。そうしていれば父の男気も晴れるし、玖廬に同調して騒ぎ立てるのも押さえた。

海様の怒りは今日を境に晴れるであろう、と玖廬が言う。恐ろしいものが一つ減って、邑人らの間に安堵が広がった。海津屋は以前よりも大きく作り直すことに、璽師は消え失せたことに、男たちは決めた。衛士が璽師を迎えに来ても、知らぬ存ぜぬで通せばいい。玖廬は地位を得て脅威を除き、何もかもが上首尾だと考えているようだ。

「しばらくしてから、漁の段取りを話し合いたい」

玖廬は立ち上がると、自らの住居へ歩いていった。その後ろを三人の男たちが続く。

「ウツボの玖廬」と、男は呼ばれていた。誰よりも深く海に潜り、岩陰に潜むウツボを捕らえるのが玖廬の得意な技だった。ウツボは獰猛な魚だ。玖廬の顎にはウツボが噛み付いた歯形が残っていた。それを自慢げに撫でるのが癖だ。漁を終える年になりつつあったが、運良く長老の地位が転がり込んできたと思っている。その点だけは、璽師に感謝してもいい。

だが、栄誉は女に与えられたものだった。璽師がいる限り、玖廬は「女に言われて長老になった」という引け目を感じ続けることになるだろう。女が男よりも劣ると、那岐邑では誰もが考えているが、玖廬もまた同じだった。長老は本来なら男たちの合議によって選ばれる。それが女である璽師に選ばれたのであれば、邑への示しがつかなかった。

殺すか。

玖廬は酒を飲みながら決意した。璽師の剣は恐ろしいが、璽師そのものは女だ。那岐邑の男が女に傅いたままでいいのか、と自らを奮い立たせた。凶暴なウツボを獲るには、巢穴に潜んでいるところを鉞で突くのが良い。璽師が寝込みを襲えば、剣などないも同然だった。

そこまで考えて玖廬は男たちを呼んだ。同じ舟に乗り、漁を営む三人だ。他に女嫌いで知られ

る古瀬丸の父も誘おうとしたが、こちらは酔い潰れていた。他愛ない、と玖廬は憤慨したが、三人いれば女を殺すことなど造作もないはずだ。

玖廬は、囲炉裏の灰を鉄串で掻き混ぜながら、三人に打ち明けた。

「壘師を殺す」

方法は海津屋に火を点けることにした。寝込みを襲うという案は、それでも剣を恐れた三人が反対したためだ。殺せば何かと不都合が起こるだろうし、海津屋ごと燃やしてしまえば海様の崇りにしやすい。そう相談した後、玖廬は囲炉裏の火を松明に移しつつ、人を殺すと思わずに、陸に上がった大魚を殺すと思えと言った。海でやる方法を、陸で行うだけだ。必ず上手くいく。

そして海津屋は燃えた。邑人は皆、これが海様の崇りであると疑わなかった。

「お前たち、良くやった」

玖廬は男たちをねぎらうために、住居で酒を振る舞おうと考えていた。これからのことを事前に話し合う必要があると感じていたからだ。まず、漁の段取りを決める席で、玖廬は改めて長老を選び直そうと提案するつもりだった。もちろん、他の者が長老になる目はない。改めて長老になれば「女に選ばれた」ことを払拭できるという思惑があった。

三人にはあらかじめ支持に回るよう言い含めておく。その代価として、三人には舟主としての地位を与える。那岐邑の男には、長老、舟主、鋷人、水手の序列がある。漁の役割分担のためであるが、舟主ともなれば邑でも相応の発言権があった。男根を切り落とされた男や、長老の息子、もちろん玖廬もそうだ。だが、壘師とのいざこざで二人が死に、一人は長老になった。空いた舟主の座を三人に分け与えれば嫌はあるまい。

玖廬らは住居の中に入った。

「おい、酒を」

と言おうとして、囲炉裏の側に座る女に目を見開いた。

「遅かったじゃないかね」

鉄串で灰を掻き混ぜながら笑う女は、昨夜、海津屋ごと焼き殺したはずの壘師だった。

「そのような場所に四人もいては窮屈であろう。遠慮せずに側へ」

後退りした男らを一睨みで竦み上がらせる。そして壘師は促して囲炉裏の周りに座らせた。明暗が分かれるとは、まさにこのことを言うのであろう。朝の晴れやかな日射しはなく、玖廬の住居内は暗闇と囲炉裏の火がもたらす澱んだ空気に支配されている。

壘師の瞳にちらつく炎。鋭気を隠し、玖廬の心を赤裸々にするようだ。那岐邑の男が集まるまでに、壘師を消してしまわなければ。玖廬にはそれが、人の手で波を止めることのように感じられた。彼我の差を比べるのも愚かしい。

「良く御無事で」

壘師は鷹揚に頷いた。

「海様が」

「海様」

「そう、那岐邑の皆が慕う海様が、女を嫌い海津屋に火を放った。だが、海様は海だから火の扱いには不得手であったようだ。我は海津屋から出ると、浜へ向かい海様にことの次第を問い質した。日輪の子である大王の命を受けた者を、独断で焼き殺すとは神々の道理にも背くのではな

いかと。海様は恥じ入って海の奥深くに潜っていった。女に言い込められて退散するとは、海様も存外にだらしない」

鹽師は嘲笑すると、玖廬を流し見る。

「そのようなことを誰が信じる」

玖廬は那岐邑の誰もが奉じるものを愚弄され、怒りに声を荒げそうになった。

だが、機先を制したのは鹽師の方だ。

「玖廬よ、私の言葉を違うというのか」

それは言葉の雷だった。

「違う、虚実、詐りと言うのであれば、確たる証拠を示せ。それとも事ここに至り、昨夜の炎は海様とは繋がらないと明かすのか。どちらでも構わないよ。祟りによって死んだはずの我が、お前の首を手にかかると練り歩くのだから」

目眩で鹽師の笑顔が歪む。玖廬たちは、海津屋に押し入った男の顛末と、汚彦と名を変えられた長老の末路を思い浮かべ、次は自らの番であると悟ったようだ。海原ではどのような波にも怯まない男が、四人もいて、吐息の近さにある鹽師に触れることすらできない。

死ぬのは嫌だ。鹽師が人を、蟹や浜虫を踏み潰すよりも容易く殺す。鹽師を海津屋ごと焼き払うという策が露見した今、状況は血肉を求める鮫に襲われる以上の際どさだ。

鹽師が手を伸ばし、玖廬の顎を掴む。

ウツボに噛まれた痕を舐める痛みに、咽から情けない声が漏れた。

「鹽師を海様の祟りで殺すのならば、お前は鹽師の祟りで死ぬべきではないのか」

恐怖から窒息してしまいそうだ。男の一人が喘いだ。

その喘ぎすらも鹽師の剣を誘うものになりかねない。玖廬は生きた心地がしなかった。だが、鹽師は玖廬の顎を掴んだまま、教諭するように言葉を続ける。

「玖廬よ、死にたくないと後ろの者が言っておるぞ。身勝手なものではないか。己の邪さから海津屋を燃やした者が、海様に罪を被せ、殺すを厭わず、死ぬのは嫌だと言う。餓鬼畜生の道理からも外れた愚か者を、玖廬よ、お前は邑を率いる者としてどう考えるのだ」

「は、恥ずべきと」

「なるほど、恥ずべきか」

鹽師は玖廬の顎から手を離すと、立ち上がった。一刻前には海様に平伏した男たちが、鹽師にも同じ姿勢を取る。演技と本心からの違いはあったが。

「恥ずべきと知るならば、恥じて生きるがいい。そして鹽師が活着していることを皆に伝え、海様よりも大王の尊意をこそ重んじるべきであると熟知させよ。玖廬よ、顔を上げろ」

「はっ」

鹽師は柿色に熱せられた鉄串の先を、玖廬の顔に近付けた。

「大王の使者を害する邑は、叛意ありとして九族を誅すことになっている。誅すとは、全身の生皮と爪を剥ぎ、目と耳を潰し、大王を讃える言葉を叫ばせながら野原に捨てて、鳥に啄まれて死ぬように仕向けることを言うのだ。玖廬よ、お前も、その男らも、男らの妻も、子も、親もだ。死霊になっても消えることのない悔いと痛みを与えることを誅すというのだ」

「は、はい」

「お前たちは、誅すに足る罪を犯した。哀れなことよ。だが、海津屋を燃やしたのが海様であり、璽師が海様の非道を裁いたということに依るのであれば、お前たちの罪まで誅するつもりはない。よくよく考えることだ。悪いのは、お前たちなのか、海様なのか」

「う、海様だ」

「海様が悪い」

「そうだ。海様が海津屋を燃やすからこのようなことに」

唯一の逃げ道を与えられて、男たちは窮した鼠の見苦しさと海様を非難した。

どこまでも愚かしい男どもよ。璽師はそう感じていたが、微笑みを崩すことはなかった。

「そうか、では海様は裁いた。お前たちは不問に付そう」

璽師は玖廬を残して男たちを下がらせた。住居の外で、命の有無を、肌に照る日によって感じていることだろう。玖廬は長老でありながら恨めしく思った。これから漁の段取りを決めるために、那岐邑の男が全て集まる。その場で玖廬は、璽師が海様の上にあると知らしめなければならないのだ。

混然とした心情を整理できないまま俯く玖廬を、璽師はどのように洞察したのだろうか。璽師の手が伸び、玖廬の手を取った。

都府の女の指は、なぜにこうも白く細いのか。日に焼けて節の目立つ那岐邑の女の手とは、名前も違うような気にさせられた。だが、その手が玖廬の左手に触れた瞬間、中指の爪が剥がれ落ちていった。

「あっ」

爪と皮膚が真逆に剥がれる。空気が刺す痛みに、玖廬は叫んだ。

「戯れだ」

他人の痛みは鳥の囀りよりも愉悦をもたらす。璽師は玖廬の耳元で、確かにそう囁いた。

漁の段取りを決めるために玖廬の住居に赴いた父が、虚脱した顔で古瀬丸の元へと帰ってきた。

「璽師様は恐ろしい御方だ」

古瀬丸には事情がそれとなく察せられた。聞き返すようなことはしなかったが、父のほうから話した。海様の祟りで焼け死んだはずの璽師が灰の中から黄泉がえり、海様を罰し、大王の徳を説いたという。父の顔色は恐れと、怒りの赤を乱高下していた。

璽師は玖廬に命じて、大王に従わない者は漁に出さないと命じた。大王に従うとは、まず璽師に従うということだ。女を蔑む那岐邑の男たちは、玖廬を顎で使う璽師に憤るかに見えた。話しても分からない者に、話して分からせようとする労を、璽師は厭う。玖廬には生殺与奪は璽師の思うがままだと知らしめていた。那岐邑の長老である限り、玖廬は璽師の走狗となって、海の理屈を通さないことに心を砕くだろう。

海の理屈を最も尊ぶのは、古瀬丸の父だ。

だが、璽師の視線を前にして、父は沈黙した。女を蔑み、憎悪に近い感情を宿した父は、その

目で壘師の恐ろしさを見抜いていたのだ。弱いと知れば殴るも蹴るも躊躇はないが、強いと知れば貝のように閉じ籠もるのが性だった。だから古瀬丸が危惧したように、玖廬と仲間たちに誘われても父は放火に加わらなかったらう。

女は弱いはずだ。だが、壘師は海様よりも強い。

「丸、酒だ」

「酒はもうない」

古瀬丸は父に殴られる覚悟で言った。

父は古瀬丸を殴り倒した。困窮した暮らしで残された蓄えも僅かだ。今日食べる魚も、古瀬丸が夜釣りをして獲たもので、父が獲った魚は全て酒に消えていた。そうと気付かない父ではなかったが、殴ることでしか我意を通す術を知らないのだ。右頬を殴られて地面に倒れた古瀬丸は、血の味に身悶えしたが、それも次の拳が降るまでだった。

「丸、母が死んだのは俺のせいだ」

首を押さえて殴る父は、古瀬丸を醜さの捌け口にしていた。

「父は母を捨てるんじゃない、酒を捨てるべきだったんだ」

古瀬丸は父の手を振り解くと、住居の入り口まで転がった。長い間飲み続けた酒が、父の運動能力を衰えさせていた。殺すことも手加減することも考えずに拳を振るう父が、空振りした腕に引かれて床に膝をつく。男を語る男の目に、男の気概を読み取ることができない。それが古瀬丸には悔しかった。

壘師は女だが、女から逃げる父は男じゃない。

古瀬丸はそう吐き捨てると、家を飛び出した。

那岐邑はもう夕暮れから夜へと変わりつつあった。太陽の色が、陸海空を赤く染めて、雲と雲の間隙が大河のようだ。邑は壘師が生きていたことで重苦しい空気の下にあった。男は壘師が女であることに怯え、その様子に女子供は不安を露わにしていたのだ。

壘師はどこに。男たちの前に現れた壘師は、玖廬や海津屋に火を放った男らを殺さなかった。古瀬丸が懇願したからではないと自覚していたけれども、結果に対して礼を言うのは誤りではないと思ったから壘師を探すことにした。壘師が寝泊まりするはずの海津屋は黒炭になったので、誰かの住居を間借りしているのかもしれない。

古瀬丸は見掛けた邑の男に壘師の居場所を訊いた。

「壘師様がどこにいるのかなんて誰にも分からない」

「何でだ」

「恐ろしいからだ。古瀬丸は壘師様が恐ろしくないのか」

男に問われて、古瀬丸は首を横に振った。古瀬丸の反応は男には虚勢と見えたようだ。男は頭を撫でると、お前の父が女嫌いだからといって壘師様に何かしようなどとは思わないことだ、と言った。海様とのしきたりが壘師に通じない以上、これを受け入れるしかないと感じている者も多いようだ。

古瀬丸は男と別れると、那岐邑を走り回り、本当に壘師がいないの確かめた。海津屋が焼失したのは昨夜だから、壘師にもまだ警戒する気持ちがあるのかもしれない。那岐邑のどこにもいないのであれば、壘師はどこに消えたというのだからう。

古瀬丸は予感に導かれるようにして、海へと向かった。

璽師様。

男岩に黒衣の女が佇んでいた。璽師は落日を見詰めている。落日は、海も陸も等しく朱に染めるのだ。璽師は知っていたように、逡巡する古瀬丸に声を掛けた。都府の落日はどんなだ、と問い掛けると、璽師は仏の教えに戸惑う凡夫のように、都府には空がないと答える。

嘘ではなく、宮で日々を費やす璽師の、心からの言葉だった。

「どうした、古瀬丸」

「ありがとう」

「なぜ礼を言う」

「今日は、誰も死ななかつたから」

璽師は微笑んだ。

「誰も死ななければ、我に感謝をするのかい」

「たぶん、それが一番良いと思った」

子供の仕草の古瀬丸に、璽師は感情の手綱を緩めた。昨夜の、海津屋が燃えるのを二人で見得たからのことを、女は考えていたのかもしれない。邑人を殺さないでほしいと言った古瀬丸に、璽師は厳しく道理を返した。玖廬や男たちを殺さなかつたのは、恐怖と道徳を熟知させるためで、古瀬丸がそこにいたからではない。

しかし、そこに古瀬丸がいなければ、玖廬や男たちは生きていないはずだ。

璽師は古瀬丸の顔に痣を見付けた。

「これはどうしたのだ」

「転んだ」

「転んでこのような痣はできないよ。子供の浅薄な見で、大人を甘く量るのは良くないことだ。このような痣が殴られてできるのを、我は知っている。誰に殴られたのだ」

「転んだ」

「父か」

「違う」

「古瀬丸の父が殴ったのだな」

「違う」

古瀬丸は目に涙を溜めて否定した。

父を想う子の気持ちが、璽師に伝わらないはずがなかつた。それは都府の者でも那岐邑の者でも同じなのだから。だが、子を殴る父の気持ちは、璽師にとって闇夜で失せ物を探るようなものだ。正当な理由があれば良いのだが、と思わずにいられないが、古瀬丸の様子を伺うと、どうも事情は根深いようにも感じられる。

古瀬丸のように賢い子供が父親に殴られるとは。璽師は痣を撫でながら、詳しく話を聴きたかったが、自制した。その線引きは怪しいものの、璽師として那岐邑に係わることはあっても、個人として他者に係わるつもりはないのだろう。璽師は鯨狩りのために来ている。古瀬丸の家の問題は、古瀬丸と父が、そして那岐邑の者で解決すべきだった。

古瀬丸は涙を拭くと、これ以上訊かれまいと、壘師のことを尋ねた。

「壘師様は、ここで何をしているのだ」

鯨狩りが目的なら、早く海に出て、早く都府に帰ればいいのに。古瀬丸でもそう思うが、壘師には壘師のしきたりがあるとらしい。海津屋が燃えて、壘師の持ち物の多くが失われたが、本当に大事なものは懐に隠してある。女が取り出したのは八角形の式盤だった。式盤とは、海の彼方で使用されているト占の道具だ。八角形の八方向には吉凶に通じる文字が記され、北斗星の方角と自らの位置を照らし合わせるために使用する。

壘師は式盤による占いを頼りに、鯨を狩る吉日を選んでいたので。大王の意による物事は、すべからく神事を装う。ただの紙、ただの文字が、大王の朱壘を印されることで万民が平伏す声になるように、尋常ではない力を持つ者は人ではないものにこそ親しむ。壘師は式盤を手に、薄闇の中から瞬く星に視線を注いだ。

「都府では外界のト占が尊ばれている」

「壘師様は漢の人なのか」

「我は漢人ではないが、祖は漢人であったと耳にしている。しかし、古瀬丸が海の向こうにある国を知っているとは思わなかった。都府の者でも知らない者は多いというのに」

古瀬丸は、笑うべきか恥じるべきか分からないという顔をした。

「昔、舟が潮に流されて、漢に流れ着いたことがあると死んだ長老が話していた。とても大きな島で、とても大きな家があって、知らない言葉を話す人がいたと」

日は海に落ちて、それでも周囲は明るさを残していた。語り巫女が朗誦する神々の系譜には、太陽と月と海の神が同時に産まれたとされている。世の半分を覆う大洋の、男岩から眺める景色には、定かではない時代へと繋がる息吹があるようだ。壘師は古瀬丸の、潮風と陽光に搾られた肌を指で撫でた。

砂利に染みる波は都府にはない音だった。歌詠みによってのみ想像するしかない景色。代々の壘師が、なぜ那岐邑で鯨狩りをしたのか、過去の記憶の連なる先に自分がいると女は感じた。那岐邑は壘師を尊ばなくなったけれども、海に面した場所は過去の百年も、未来の百年も変わらないだろう。

海の眺めは、心を安らかにする。

「明日、鯨を狩るのか」

「ト占に従えば、明日は避けるべきとある」

「便利な道具だ」

「当たるときもあるが、外れるときもある」

壘師は式盤を懐に入れた。

「じゃあ、なぜ占う」

古瀬丸の疑問に、壘師は答えなかった。ト占の方法を知っていれば、正否を問うよりも先立って、ト占の方法を試したくなるからだ。そのようなことを話したとしても、古瀬丸は納得できないと思う。それよりも、壘師は古瀬丸に占おうかと誘ったが、怖いから嫌だと断られた。

変わった子供だ。

都府ならば位の高低を問わず、我先にと式盤を試そうとするのに。

「鹽師様は、夜はどうするのだ」

「海津屋が燃えてしまったからね。このまま星を見ながら朝を待つつもりだよ」

「そうか。邑人には黙っておく」

「ありがたいね」

「約束したよ」

古瀬丸は笑うと、男岩から降りていった。

鹽師が、昨日までの鹽師と変わりがなくて良かったと思う。那岐邑の者に接する態度で、古瀬丸にも対応するのではと、心のどこかでは危惧していたからだ。焼け跡のみが残る海津屋を通り過ぎ、完全に日が暮れてしまう前に、住居へ帰るつもりだった。

戻れば父が、また殴るだろうか。

そう思ったけれども、殴られたときは殴られたときだ。耐えられる気がした。

だが、住居に戻った古瀬丸を、父は触れようとしなかった。

「丸」

囲炉裏の火に炙られる魚を見詰め、父が古瀬丸に問い掛ける。

「何だ」

「鹽師様と何を話しておったのだ」

頼りなげな声に、父の弱気が露わになっていた。父は古瀬丸を追って、男岩の近くまで来ていたのだ。殴り足りないと思っていたのか、古瀬丸を連れ戻そうとしたのか、その思惑は男岩に立つ鹽師によって打ち砕かれてしまった。那岐邑では誰よりも女を蔑んでいた父が、女に手出しもできずに住居に帰り、酒もなく悶々としている。

舟を駆ることが喜びだった父は、もうどこにもいなくて、ただ犬のように遠吠えしていた。

古瀬丸は、そのような父は見たくなかったから、父の心の変化にも気付かなかった。

「鹽師様は、誰にも話すなと言った」

「そうか」

会話が途切れたまま、夜が過ぎていく。

## 【下】

翌日、玖廬に近い男が、古瀬丸の父を呼び寄せた。

壘師の使いだという。那岐邑では皆が、父の人間性を知っていたから、生きては戻らないだろうと口々に囁いた。古瀬丸は野草を取りに行き、未だ帰ってきていない。邑人の視線があわれを物語っているようで、汗を滲ませた父は、自然と足取りも重くなっていった。

日は温かく、風は草を揺らしているが、気休めにもならない。

「早う歩けよ」

と、男が言う。父の視線は海津屋に向けられていた。海様を祀る海津屋が焼けたときは、壘師も死んだと喜び勇んだが、それが早計だったと分かると、喜びは深い恐れに転じた。女が、と父は呟いた。男がこの有様で、那岐邑はどうなってしまおうのだろうか。

「すまんのう」

「なぜ謝る」

「海津屋を燃やしたのは農らだ。海様ではないんじゃ」

男は申し訳なさそうに言った。

父は慚然としたが、玖廬の豹変ぶりや海津屋が「燃えた」ことから、虚言とは思わなかった。海様ならば壘師を波に押し流すだろう。玖廬が壘師を殺そうとして、火を放ち、失敗に終わった。壘師はそれを逆手にとって、海様よりも上に立つ証拠としているのだ。罰当たりな、と父は考えた。壘師を殺すために海津屋を燃やすとは、海様への恐れも忘れたのかと。

壘師は昨日と同じく、男岩に佇んでいた。

男岩も那岐邑では女の立ち入りが許されない場所だ。男たちは男岩から海を眺め、魚群を探し、舟を繰り出す。那岐邑の男が生業とする漁のための場所であり、当然、男だけのものであったはずだ。

「何も感じないのか」

「お前と同じだ」

「壘師め」

「そう思うなら直接言え。ほら、壘師様が待っておるぞ」

父は男岩を登ると、壘師に相對した。

怪しげな呪具を持つ壘師が、父には思考の届かない者に見える。

「古瀬丸の父か」

壘師は言った。

「志摩夫と申します」

「名前などはどうでもいい。お前は古瀬丸の父なのだろう」

「はい」

古瀬丸の付属物としての父に用があって、志摩夫には興味がない。壘師は暗にそう仄めかしているのだと、父は気付いた。昨日、古瀬丸と壘師が何を話していたのだろうか。海津屋が焼けたときも、古瀬丸は壘師が活着していると知っていた。

「頭が高い」

鹽師に言われ、父は膝を折った。

木製の仮面や竹で編んだ被り物は、海津屋と共に焼失したため、鹽師は素顔を晒している。切れ味鋭い逆剣も今は所持していなかった。血を伴う武器を持ち続けるのは、呪い人に連なる鹽師にとって忌諱すべきことなのかもしれない。父の目は、刃ではなく式盤を握る鹽師の手に向けられていた。

女が、という意識が膨らむ。素手なら男の力で屈服させられるのではないかと父は思ったが、手を伸ばした鹽師が有無を言わさぬ力で頭を地面に押し付けた。抗おうとしたが無理だった。荒波を櫂だけで渡り、海中の大魚を吊り上げる漁夫が、都府の白い手に屈服してしまう。男岩の鋭利な凹凸が額の皮膚を擦り、血が滲むのを父は感じた。

鹽師様は恐ろしい御方だ。日頃、声にしていた言葉が甦る。

「女は犬畜生と同じ、殴って言い聞かせる、ではないのか」

「そのようなこと思ったことはありません」

「そうか。皆が口々に言っていたが、嘘だったか」

鹽師は鼻で笑うと、父から手を離れた。額から滴る血が左目に入る。父は鹽師が自分の心を読んだと思い、背筋を凍らせた。剣を持たない鹽師を侮り、手を出したらどうなっていたらだろうか。古瀬丸の父は、鹽師ほどに人を殺すことが得意ではなかった。

殴ろうとすれば殴られ、組み伏せようとすれば投げられ、男岩から墜死しただろう。海に落ちるのではなく、波が洗う岩肌に頭から落ちて。踏み止まったから額の傷だけですんだのだ。父の思考力は麻痺していて、鹽師に殺される想像だけが今の呼吸を乱していた。

奇妙な男だ。鹽師は父を見て思った。

女を蔑むのと同時に女を恐れてもいる。鹽師は邑の者から、古瀬丸の父がどのような性格をしているのか、それとなく耳にしていた。害を為すなら手を打つべきかと考えていたのだが、那岐邑の誰よりも鹽師に従順なのは、今までの遣り取りでも明らかだった。古瀬丸のほうが余程骨がある、と思うほどに。

「今日は古瀬丸の父に用がある」

「どのような」

「舟と古瀬丸を、我に預けてほしい」

それは意表を突いた申し出だった。

一日で良い、と鹽師は父に言った。那岐邑に来た理由は鯨を狩ることであり、ト占によって吉日を選んだとしても、舟と漕ぎ手がいなければ海に出ることも叶わない。

古瀬丸の父は、鹽師の言葉に瞠目した。

鯨は狩る魚ではない。那岐邑の漁民でも、鯨とは浜辺に漂着するものであって、海に繰り出し鉞を打つ対象ではなかった。そのような真似をすれば、死ぬだけだ。鹽師は漁を知らず、海にも詳しくないから、「鯨を狩る」などと言えるのではないかと。父は漁民であるだけに、常軌を逸した目的に唾然とした。

だが、鯨を狩るのなら、望み通りにすればいい。

「丸のことであれば、鹽師様に喜んで従いましょう」

「そうだな。あの子は賢い」

璽師は懐から金子を出した。

「納めよ」

都府であれば、半年分の米穀と交換できる大きさだ。大王の世では、金が産出される山はまだなく、東夷の砂金師か国外の商人がもたらすものに限られていた。金の価値を知る父は、受け取ると、額が再び岩に当たるまで頭を下げた。

父は璽師の申し出を承諾した。

その後、父を男岩から帰すと女は玖廬を呼んだ。玖廬に命じ、海津屋を再建させるためだ。海津屋は粗末なもので構わないが、海様と大王への敬意を忘れないよう心を砕け、と注文する。今、那岐邑で璽師に逆らう者はいないだろう。だが、次代に同じことが繰り返されれば意味を成さない。それは璽師にとっても那岐邑にとっても不幸なことだ。

鯨狩りに際しては、身を清めるために籠もる小屋が必要だった。璽師は呪術に通じ、朱を集めることは祭祀の一つでもあるからだ。今からでは間に合わないので、代わりとなる住居を選ぶことにした。それは海にほど近く、誰も住んでいないという理由で、汚彦の住居に白羽の矢が立った。

後は、日時を選び、備えをするだけだ。

「玖廬よ」

璽師は玖廬を呼び止めた。

「はい」

「夜に海を見ていると、青く光るものが幾つも見えた。あれは何であろうか」

「邑では海様の灯火と呼んでいますが、実際は、小さな烏賊が光っているようです」

「やはりそうか」

璽師は自らの推察が正しかったことに満足した。海様の灯火の正体が烏賊であるなら、その光に誘われて鯨が現れるのは道理に適ったことだ。鯨は海を覆う烏賊を飲み込むために、那岐邑の近くを遊泳しているのだろう。

式盤が吉日を指図している。

頃合いも、今以上に良くなることはないと言った璽師を見た。

「玖廬よ」

「はい」

「今日明日は家に籠もらねばならない。鯨を、狩るために」

「鯨をでしょうか」

「そうだ」

「鯨を狩るなど容易なことではないと存じます」

玖廬は控え目に「容易なことではない」と言ったが、古瀬丸の父と同じく、璽師の言葉に我が耳を疑った。ウツボ獲りの名人である玖廬でも鯨に手を出す勇気はない。

玖廬はかつて、十里ほど西に行った邑での出来事を思い出した。その邑では不漁に喘ぎ、生きるか死ぬかの瀬戸際で鯨を狩る決意をしたのだ。しかし、手練れの漁師が総掛かりでも荒ぶる鯨を仕留めることはできず、海に落ちた漁師は次々に海の奥底へ沈められた。海岸に打ち上げられ

た水死体は、内臓が口から吐き出されていたという。

鹽師は玖廬の感情を読み取っていた。

「鯨狩りは我一人です。気に病むな。玖廬には海津屋の再建と、大王への忠誠を子孫に伝える役目を全うしてもらいたい」

「承知いたしました」

「去れ」

鹽師に言われ、玖廬は木の葉のように男岩から立ち去った。

空に雲は疎らで、穏やかな海が青い。衛士と共に那岐邑を訪れたときは、真綿のような雲に覆われていたが、女の鹽師が男を傳かせると天候までが逆転したようだ。鹽師は黒衣の中に隠していた逆剣を取り出す。巧妙に剣を隠したのは、古瀬丸の父の性根を見極めるためだった。

呪術師の剣は左手で扱うために「逆剣」と呼ばれている。代々の鹽師が受け継いだ逆剣は、漢の錬鉄工が鍛えた業物だ。片方は鋭利に研ぎ澄まされ、片方は鋸状の歯がついている。歯は毒を染み込ませるためのものだ。突けば鋭利な刃で肉を貫き、鋸の歯に塗られた毒が肉を腐らす。呪術師に相応しい剣であるが、鹽師はこれを「棘」と名付けていた。

海津屋に籠もり、身を清め、鯨を殺す毒を剣に塗り込める。

鹽師は男岩を降りた。

その足で死んだ長老の住居へ向かう。土手で土師壺を作っていた女らが、鹽師を目にして一様に顔を隠した。女を蔑む風習は、男にも女にも受け継がれているのだろう。そのようにして守られた秩序の視点からは、誰にとっても鹽師は「異物」であった。鹽師の女を見る目は冷やかかで、そのまま無言で通り過ぎると海津屋の焼け跡に立ち寄った。

焼け跡には鹽師が持参したものが残っていた。多くは燃えてしまい、用を為さないが、薬器は土器と鉄で作られているため無事だった。仮面などの呪物は焼けたが惜しくはない。韓風の持ち運びできる竈と、幾つかの鉄瓶を取り出すと、鹽師は安堵したように目を細めた。竈は毒を煮るために必要だったし、鉄瓶には山蛇の唾液や砒素が入っている。

長老の住居に入ると、古瀬丸が待っていた。

携えている駕籠には草や鮮やかな茸が入っている。

「採ってきた」

「上出来だよ。これらは毒だから、手を洗っておいで」

鹽師に言われ、古瀬丸は隠し持った茸を慌てて手放した。後で食べるつもりだったのだろうが、食べていれば運次第で死ぬこともありえる。古瀬丸は住居を出ると、水桶で手を洗った。戻ると、鹽師が持ち主のない皿を並べ、毒茸や毒草を選り分けていた。古瀬丸が集めたのは毒芹、附子、石楠花の葉、紅茸などだ。

鹽師は米を竈で煮ながら、それらを混ぜ、練り合わせていった。意味の聞き取れない呪い言葉が、澱みつつある空気と共に、古瀬丸の顔を歪めさせる。

「古瀬丸よ、今日はもうお帰り。毒気は、子供が吸うものではないから」

「分かった」

「近々、鯨を狩りに行く」

古瀬丸は無言で、鹽師の横顔を見詰めた。

「その時は、真夜中になるだろう。舟を出す手筈は整えている。鯨狩りは鹽師のしきたりだから、邑の手は借りない。我を疎ましく思う者どもにとっては吉報と言えるであろうな」

「誰が舟を漕ぐんだ」

「お前だよ、古瀬丸。父にも伝えてある」

鹽師は穏やかに言った。

古瀬丸が父に売られたと知るのには、自らの住居に戻ってすぐのことだ。鹽師から与えられた金子で、飲みきれないほどの酒を得た父は、悪臭を放ちながら酔い潰れていた。母のことを思った古瀬丸は、怒りで目頭が熱くなってしまい、住居を飛び出し泣きながら走った。

心臓の動悸が父への怒りを超えて、古瀬丸は走るのをやめた。

那岐邑から離れた、草地の中、林と山を見渡す場所だった。どうやら古瀬丸は無闇に走り、見ず知らずのところへと来てしまったようだ。子供の足で行ける場所などたかがしれていたが、心細さが募るには十分だった。

このまま那岐邑を出てしまおうか。

そう思ったが踏み切る勇気がなかったので、帰る道を探すことにした。道など関係なく走ったために、自分がどの辺りにいるのかも分からない。目印になるものを探して、古瀬丸は半刻ほどさらに彷徨った。

その最中でも、父のことが頭から離れない。父は、自分も嫌ってしまったのだろうか、母のように。酒に酔い潰れた父には、古瀬丸が見えていないようだった。酒を飲みだす前の父は、女を蔑むような性格ではなかったし、母や子を大事にする手練れの漁師だったのに。酒を飲み出した父を、母は常に気遣っていた。父が酒に溺れて母を殴るようになると、家内の言葉は潮風に当たる鉄器のように錆びていった。

鹽師が父を殺せばいいのに。

古瀬丸は眩き、耳にして怖くなった。なぜ誰も望まないことになったのだろう。酒のせいだと父も気付いているはずなのに、なぜ飲み続けるのだろう。怒りを超過すると、古瀬丸はあるべき父と母を歪めたものを恨めしく思った。

しかし、父は古瀬丸にとって一人だけの父親だ。那岐邑に帰ろう。生い茂る草は膝までの高さで、途中で点々と樹々が散らばっている。

蠅の飛び交う音がして、草を踏みながら歩いた古瀬丸は、腐乱して鳥獣に啄まれた死体と出会った。驚いて叫んだが、その死体は鹽師に男性器を切り落とされた男だ。死ねば海に流すのが那岐邑の葬儀であるため、腐った死体を目にする機会はほとんどない。だから、その臭いと骨の露わになった姿に古瀬丸は打ち震えた。

死んだ長老と息子も、このどこかに捨てられているのかもしれない。

一刻も早く離れたくて、古瀬丸はまた走った。鯨狩りの舟に漕ぎ手として乗れば、魚の餌になるだけだ。玖廬や父と同じことを考えていた。草地に捨てられた男のように、海に揺り落とされ、全身を喰われるのはおぞましい。

不意に横から声を掛けられた。

「子供がここで何をしている」

振り返ると、樹木の下に衛士が佇んでいた。

黒髭を生やし、弓を携えている。衛士は鹽師を那岐邑へと運んだ者たちの一人だった。彼らは輿に乗せた鹽師を海津屋まで運ぶと、しきたりに従い那岐邑を出た。だが、衛士らはそのまま都府へと戻ったのではなく、那岐邑のそれほど遠くない場所で野営をしていたようだ。行きと同じように、鹽師が輿に乗って帰ると考えれば、そうなのだろう。

弓を持っているのは、狩りをしている証だ。

その弓で射られるのは嫌なので、古瀬丸は正直に答えた。

「那岐邑に帰るところだ」

「そうか。那岐邑の者か」

衛士の表情が緩む。都府の華やかさに比べれば、このような場所で野営をするのは耐え難いことだろう。狩りをして食料を賄う以外、基本的には何もしない。だから古瀬丸のような子供でも、話し相手としては十分だった。

「鹽師様はいつまで那岐邑に留まるつもりだ」

「近く、鯨を狩ると言っていた」

「そうか。それならば都府に帰れる日も近いであろう。皆も喜ぶ」

衛士は微笑むと、古瀬丸に兎を投げ与えた。狩りで得たものなのだろうが、受け取るべきか迷う。衛士はその弓で、他にも三匹の兎を射たようだ。四匹もいては食べきれないので、喜ばしい知らせを運んだ礼に持って帰るがいい、と衛士は言った。この男は鹽師が那岐邑に来た理由を知っている。ならば鹽師が鯨を狩る理由も知っているのではないか。

「なぜ鹽師様は鯨を狩る」

古瀬丸は問い掛けた。

「朱鹽のため、と聞いている」

「朱鹽とは何だ」

「高貴なものらしい。大王がお求めになられたという以外は知らん」

古瀬丸は残念そうに俯いた。

兎を取ると、衛士に那岐邑の方向を教えてもらい、古瀬丸は帰りを急いだ。朱鹽のために鯨を狩る。高貴なもののために死ぬのは、命の価値に釣り合うのだろうか。鹽師は嫌いではないが、都府の道理を那岐邑に強制するのは嫌いだ。でも、酒に酔い潰れた父はもっと嫌いだった。

父が忌み嫌う女と、父が殴る我が子が、那岐邑の誰もが成しえない鯨狩りをしてみせれば、その膿んだ心を洗い流せるかもしれない。古瀬丸は考えた。鹽師は朱鹽とやらを得るために鯨を狩ればいい。古瀬丸は、酒に溺れた父を取り戻すために、舟を漕ぐ。

古瀬丸にとって高貴なもの、命と引き替えにしてもいいと思える理由は一つだった。

古瀬丸が那岐邑に帰り着いたときには、もう夕方になっていた。

住居に戻ってみると、父は相変わらず酔い潰れたままだ。

「とと」

古瀬丸は囲炉裏の周りの、いつも自分が座っていた場所に兎を置くと、父に別れを告げた。鯨

を狩り、九死に一生を得れば、そのときは丸を我が子と見てください。古瀬丸は寢息を立てていた父にそう言った。夢現で耳に入っていなくても構わない。

父の手が恋しくなって、唾を飲み込むと、古瀬丸は近寄った。枕にしている右腕に触れようとしたが、虻蚊のように振り払われて、古瀬丸はいつものように後退る。殴られた記憶が鮮明で、撫でられた記憶には靄が掛かっていた。父の名を呼んでも返事はないので、古瀬丸はもう一度名前を呼んだ。寝苦しそうに顔が歪む。

そして、父は母の名を呟いた。

璽師様は恐ろしい御方だ。この時、なぜ父がそう言うのかを古瀬丸は理解した。父は璽師が恐ろしいのではなくて、母に復讐されるのが恐ろしくて、璽師と母を混同していたのだ。心の底で渦巻く感情が、蔑視のかたちになって父を強がらせ、畏怖となって璽師の前でも四肢を縛った。古瀬丸は父の名を咽に詰まらせて、淋しく住居から出た。

哀れだと思ったのだろう。

海に向かって歩く。璽師が鯨を狩ると、もう多くの者が知っていた。そして、愚かな行為で死ぬなら死ぬと、誰もが願っているようだった。玖廬が古瀬丸を呼び止めると、ウツボに噛まれた顎を撫でながら、鯨狩りから戻れば入れ墨を許すと言う。生きていれば、と前置きしないのは、古瀬丸をそこまで見通せない子供と思えばこそだった。

「父をお願いします」

古瀬丸が顔を伏せると、玖廬は言葉を失った。

那岐邑の誰よりも聡明なのが、未だ男と認められてもいない子供だと、玖廬は気付きかけたのかもしれない。長老として子供にも何一つしてやれないのかと、玖廬は古瀬丸の後ろ姿を見て思う。男らが、これで璽師が死ぬば万事が丸く収まると囁いたが、頷く気にもなれなかった。

浜辺までの道は緩やかな降り坂だったが、足取りは急峻な山道に行くよりも遅かった。しかし古瀬丸の心が思い描くよりも随分早くに海へと到着した。海に接した太陽が、最後の輝きを放っている途中に、璽師の姿があった。波際に立ち、黒衣の裾が濡れるのを楽しんでいるような様子に、古瀬丸は母の面影を見た。似てもいないのに。

「おう、待っていたぞ」

璽師は古瀬丸に笑みを漏らした。

「日が暮れるのを待つのか」

「海様の灯火が鯨を呼び寄せるだろう。慌てることはない」

すでに一艘の小舟が浜に出ている。

大海を我が物顔で遊泳する鯨に比べ、落ち葉のように頼りない。大人の男が総掛かりで璽師を助けたほうが、鯨狩りも少しは容易になるのではないか。古瀬丸は思ったが、璽師はそれがしきたりであるという他に、女と子供が鯨を狩ることに大きな意味を見出していた。怖いのか、と璽師が問うと、怖いのはもう通り過ぎた、と古瀬丸は答える。

顔は、漁師のもの以上に輝いていた。

「璽師様」

「何だ」

「朱璽とは何だ」

古瀬丸は純粹な好奇心から問い掛けた。

だが、朱璽を子供に説明するのは難しい。

「朱璽とは身の証だ」

「そうか。身の証は大切なものだな」

古瀬丸はなぜか璽師の答えに納得した。それは古瀬丸もまた、自分が父の子であるという証を持って、鯨狩りから生きて帰りたいと思っていたからだ。璽師と共に死んでしまえと思っていたとしても、生きて帰れば、そのことが酒から父を取り戻す契機になるはずと。

璽師もまた、何かに自分を認めたがってもらいたいのだろうか。都府のことは知らないけれども、身の証のために鯨を狩らねばならないほどの悩みが、璽師にもあるのだ。古瀬丸の目には、初めて女が近しい者として映った。本当は見当違いだったが、古瀬丸の心を璽師が見抜いていたとしても、あえて否定はしないだろう。

夜を待って、璽師と古瀬丸は海へと繰り出した。

夏はすぐだというのに、涼しい潮風が舟上の二人を扇ぐ。海はこれほどまでに波揺れるものなのか、と璽師は縁に手を伸ばして呟いたが、表情はむしろ楽しげだ。瀕死でなければ鯨が浅瀬に来ることはないので、沖へと舟を走らす。

波が砕け、飛沫になって舞い上がる。櫂を漕ぐ手にも力が籠もった。暗闇に黒く染まった水面を三日月が弱々しく照らしていて、魚の泳ぐ海ではない、得体の知れないもののようにも思える。視野が利かないと不安が募る。得体が知れないものの正体は未来だ。月や星々は弱々しいが、海様の灯火が鯨への道標になるだろう、と璽師は言った。

漁師でもないのに。

古瀬丸は女を睨んだが、もう夜海に出ては璽師も漁師も関係ないということに気が付いた。女も子供も関係ない。未経験のことをするのだから。

「鯨は現れるだろうか」

古瀬丸は潮風の音に耳を傾けながら呟いた。

「占いでは今日と出ていた」

「当たることも、外れることもあるんだろ。璽師様はそのようなものを信じているのか」

「いるとも、いないとも言えない海様を信じるようなものだ」

「海様はいるよ」

璽師の挑戦的な物言いに、古瀬丸は即答した。

「では、鯨も現れるだろう」

「なぜそう思う」

「海様は女が嫌いなのであろう。であれば、鯨に女を殺せと命じるのではないか」

璽師様は海様も占いも信じていないのに、都合の良いときだけ利用するのか。古瀬丸は櫂を漕ぐのを止めると、海水に指先を入れてみた。冷たくも温くもなく、漁師が「死んだ」と言い合う水が指を濡らす。漁であれば豊漁か不漁かが極端に分かれてしまう海だ。それが鯨狩りに、どう影響するだろうか。

すでに舟は沖合に出ていた。浜辺が遠く小さい。海は巨大さを隠しつつも、隠しきれないよ

うだった。鹽師が呪言を呟きつつ、鞆に収められた逆剣を抜いた。深海の澱みに揺らめく、静かな気配を感じ取ったのかもしれない。それは潮の臭いになって、古瀬丸の漁師の血にも伝わる。時間が遠離るのではなく、近付いていく感覚に似ていた。島ほどの鯨が現れれば、小舟はそれだけで破壊されてしまわないだろうか。夜の海に落ちて、浜辺まで泳げるだろうか。

古瀬丸は櫂を握りしめた。

「鹽師様、毒の調子は良いのか」

「どうだろうね。毒は毒の役目を果たすだけさ」

鹽師が微笑むと同時に、海が青く煌めきはじめた。

海様の灯火。海の奥深くから、一つ二つと見えて、瞬く間に光が小舟を包囲する。海に星が、足下に空があるようだ。鹽師は海に手を伸ばし、触れたものを捕まえた。

手応えのない、柔らかなものが掌中にある。

玖廬の言葉通り、光を放っているのは小さな烏賊だった。万を超える煌めく烏賊が、空を染める朱鷺のように、海にひしめいているのだ。舟の上からでも、烏賊を目当てに大魚の暴れているのが確かめられた。男岩からは海中の変化が読み取れなかったが、漁師が夢にまで見る光景が広がっている。

そして、鹽師の目当ても波間から現れる。

「岩か」

「あれが鯨だ」

鹽師は叫び、古瀬丸も叫び返した。

死傷した鯨を「寄せ鯨」と言い、海の賜物として食すことは昔からあった。鯨を舟で取り囲み、銚を打ち込む「鯨狩り」も、困窮した漁民の最後の手段として行われていた。

だが、鹽師のように一人と一艘の舟と一本の剣で鯨を殺そうとする者はいない。

「やはり無理なのか」

と呟く。

鹽に巡り会えた鹽師が、相応しい朱を作るため、鯨を狩る。鹽師は誰にも言わなかったが、これまで鯨を殺した鹽師はいないと気付いていた。鹽師は鯨に挑み、鯨は鹽師を殺し、そこで血統が絶える。大王は大漢の皇帝に謝辞を述べ、野蛮の地に鹽の扱いに長けた者の招聘を求め、新たな朱鹽が完成するのだ。海津屋は本来、鯨に殺された鹽師を供養するためのものだった。

それが古来からのしきたりなのだ。

鯨を狩るなどという話が昔語りにも残っていないのは、失敗したからに決まっている。鹽師ほどの聡明な女が朱鹽に秘せられた思惑に勘付かないはずがなかった。逃げようと思えば逃げられた。実際に逃げた鹽師もいただろう。

女には、大王の側に控える者としての矜持があった。

面と向かって死ねと言われたわけではない。死を期待しているのであれば、生きるのも勝手であろうと鹽師は思っていた。困難であろうとも成し遂げる自信はあった。一人で城を傾けた女もいるし、国を滅ぼした女も枚挙に暇はないのだから。

烏賊を飲み込む鯨の口が、飛沫と恐怖を撒き散らす。

「璽師様、どうする」

古瀬丸が大声を出した。

海の質量が膨張し、小舟に押し寄せる。鯨の巨躯が浮かび上がり、沈むのを、璽師も古瀬丸も凝視することしかできなかった。息を止めていたからか、鯨が潜った後で、古瀬丸は荒い呼吸を繰り返した。ここに至れば璽師だけが頼りだ。

璽師は鯨に勝つ算段をしていた。優位なのは逆剣に塗られた毒と、最初の一撃が奇襲になるということだ。鯨にとっては小舟などは敵の範疇にもない。だから、海中から黒々とした背中を出した瞬間は、必ず攻撃が成功するだろう。

最も効果的な部分を狙う。

「鯨が出てきたら舟を寄せよ」

古瀬丸に命じた。

璽師様は馬鹿だ、という言葉飲み込む。ここで引き返すのは容易いが、それでは何も進展しない。二人は二人の事情で鯨と戦うことを決意した。

やや離れたところから鯨が浮かび上がる。

「璽師様、あそこだ」

「寄せよ」

だが、時を同じくして、舟の間近で海が迫り上がった。大嵐に翻弄されるように、古瀬丸の身体が舟から飛ばされそうになる。それを璽師が片手で防いだ。舟を持ち上げようとしたのが二頭目の鯨であることに璽師は気付いた。

烏賊の光に、海の様子は簡単に把握できる。

古瀬丸は、寄り添おうとする二頭の鯨を注視していた。小さな鯨と、比べるものがないほど巨大な鯨。大鯨は小舟から発せられる殺意を感じているのか、小さな鯨を守りながら遊泳している。

親子だ、と古瀬丸は直感した。

「璽師様、あの鯨は親子だ」

「そう」

「璽師様、あの鯨を殺さないで」

古瀬丸は、大鯨に父親の幻を見て、叫んだ。

威嚇のためなのか、大鯨が小舟に近付いてきた。璽師の目は海に向けられて、古瀬丸を顧みる余裕がない。逆剣を伸ばして、海から迫る鯨の背を斬った。流されまいと櫂を漕ぎ続ける古瀬丸の目の前で、毒の剣先が鯨の皮膚を裂く。

青い光の海に、血が数滴零れた。

「璽師様」

「浅い。あれでは駄目だ」

苛立ちながら、一撃目が失敗したことを舌打ちする。柔らかな岩を斬るようなものだ、と璽師は剣の手応えを感じていた。下手をすれば剣が砕けるか、手首が折れる。そして、璽師は自らの算段が外れていたことに焦燥していた。鯨は最初から、小舟の人間を敵と認識していたのだ。

次は沈める、と主張しているようだ。

「古瀬丸よ、また来るぞ」

「璽師様、あれは子供を守っているんだ」

「逃げないのであれば、都合良いとも言える」

青い煌めきは鯨の巨体が通ると、黒い道になって残される。舟の上からでも、鯨がどのように泳ぎ、再び舟に向かおうとしているのが分かった。先程は威嚇だったが、剣で傷付けられた二度目は、小舟を破壊しにかかるに違いない。

大鯨の巨軀が小舟の下を潜る。

「璽師様」

その時、古瀬丸が璽師に飛びかかった。

何が起きたのか、璽師には認識できなかったようだ。混乱は瞬く間だったとしても、その時の衝撃で剣が海中に落ちた。古瀬丸は子を守ろうとする鯨にかつての父を見ていたが、璽師には暴拳としか伝わらなかった。掴みかかる古瀬丸を殴り、首に腕を回す。

「お前も那岐邑の男ということか」

血走った目で、璽師が声を吐き出す。

「あれは、子供を守っているんだ」

「だからどうした」

「あの、鯨は、僕とととだ」

古瀬丸の涙に、璽師の力が緩んだ。

その時、鯨が二人の乗る舟に衝突した。

青白い光と闇の海に、璽師も古瀬丸も突き落とされる。波を伴う鯨の巨軀を、璽師は肌で感じたが、目では何も見えなかった。海水の渦に身体を奪われ、古瀬丸を助けようとすることも、死地から抜け出ようとすることもままならない。

ただ、浮かび上がろうとするだけだ。海から顔を出した璽師は、大きく息を吸い、舟の残骸に古瀬丸の姿がないのを見た。次の瞬間には、璽師の身体は再び海中に沈んだ。

大鯨の口が璽師の右腕をくわえていた。

細い歯が璽師の右腕を血に染める。耐え難い激痛に顔が歪むが、叫んで肺に蓄えた息を減らす真似はしなかった。ただ、残された左手で死中に活を見出そうとする。鯨が深海へと潜ろうとする寸前に、璽師は左手で衣服の中に隠していた薬瓶を掴んだ。それを鯨の口に入れ、無理矢理右手を引き抜いた。

右手の感覚を失ったまま、息をするために浮かび上がる。血と水圧で意識を失ってもおかしくなかったが、生きようという意志が璽師を奮い立たせていた。鯨がまた襲いかかってくれば、その時が生死を別つときだ。璽師は古瀬丸を探そうと、周囲を見渡したがいないので、諦めた。

左手を伸ばし、次の攻撃を待ち構える。鯨の口に入れた薬瓶には毒が入っていたが、効果が現れるのは時間が掛かりそうだ。もっと直接的に傷口に毒を注ぎ込まなければ、鯨を殺すことはで

きない。

「古瀬丸」

璽師は呟いた。

海の底から迫る黒い口。璽師が再び海中に引き込まれる。

足に食らいついた鯨は時を置かずに璽師を奥底へ沈めようとした。細かな泡が璽師の身体から広がっていく。このままでは、十を数えるよりも早く内臓が水に潰されてしまう。力を。光を放つ烏賊の群れが璽師の瞳に映り、左手に渾身の力が注がれる。

左手に握られているのは、毒の逆剣だった。

殺気に彩られた璽師の目と鯨の目が、突き刺さる僅かな間、交差する。

璽師の剣が鯨の目に突き込まれ、その脳を貫いた。恐ろしいまでの咆吼が鯨から発せられ、巨躯が複雑に振れる。鯨の口から解放された璽師は、小舟の残骸を頼りに浮かび上がった。死の淵を覗き込んだ女の顔は血の気が失せていたが、剣を突き込まれた大鯨が藻掻き苦しむのを目撃した。神経に作用する麻痺毒が、損傷した脳を殺そうとしているのだ。

鯨は浮かび上がった。

また沈む。

鯨の臓腑に溜め込まれた命が、飛沫となって降り注ぐ。闇夜でありながら空と海の光の狭間で、大鯨は浮沈するごとに海を爆ぜさせた。鯨の全身に毒が回っているようだ。脳を冒され、身体が麻痺し、呼吸が不完全になり、心臓が止まる。それでも目に剣を突き立てたまま、鯨は人に殺される屈辱に怒り、戦い続けた。

鯨の鼻先が、璽師の身体を宙へと舞い上げる。

死。

空中と海中の違いも分からないまま、ふと璽師は思った。古瀬丸を殺し、鯨を殺しそこね、自らも死ぬのか。海に叩き付けられた璽師は、身体が烏賊の光に包まれていくのを感じた。大鯨が光の雨を飲み込みながら璽師の覆い被さる。目まぐるしく海の昼と夜が入れ替わった。

璽師は左手を伸ばした。

その先に、鯨の目に刺さる剣がある。

「古瀬丸、力を貸しておくれ」

璽師は海中に消えた古瀬丸に助力を願った。そして剣を引き抜く。

大鯨の目から血と脳髓が溢れ出た。血は海を染め、璽師の身体を洗った。岸では篝火を焚いた那岐邑の人々が、この壮絶な戦いを見守っていた。鯨は潮を吹くと、巨大な尾を振った。璽師の姿はもうどこにも見えない。力尽きたのは鯨も同じだ。最後に浮かび上がると、弱々しく鰭を動かすだけで、やがて泡が大鯨の死を決定づけた。

「璽師様も、鯨も死んだのか」

玖廬の横で男が呟く。

「明日になれば、死体は浜に上がるだろう」

「そのときに、どうするか考えよう」

大鯨と戦う璽師の姿は、誰の脳裏にも焼き付いていた。誰も、二度と忘れないだろう。玖廬は篝火を消して、皆に住居へ帰るよう諭した。鯨の命と引き替えに、海様は古瀬丸と璽師の命を飲

み込んだ。それが結果の全てと知りながら、玖廬には喜びも恐れも見出せなかった。

命を失った大鯨は、波間を漂い、浜辺に揚がった。

砂利の浜を塞ぐほどの大きさ。朝日を浴びた大鯨は、黒々とした巨体に白い霜が降りているようだった。砂利の浜辺に寄せる波が、汚れた血を伴って海へと返る。海のもものが何もかも輝いていた。砂利の一粒、波の欠片、潮風の揺らぎに至るまで。

だが、輝いていないものも海岸にはあった。

璽師は大鯨の側に立ち、剣で肉を切り裂いていた。

海に落ちた後、どのようにして浜に辿り着いたのか、璽師は覚えていなかった。波に流されるまま浮かんでいたのが、璽師を死の淵から救ったのだろう。鯨に噛まれた右腕は細かな傷が走り、枯れ枝のように数カ所が折れている。右足は折れてはいなかったが、痣ができ、感覚を失っていた。

生きていれば、璽師の務めを果たすことしか、今の女にはない。

腹を抉り、鯨の臓腑を引き出す。海鳥が騒ぎ、この時になって玖廬をはじめとする邑人が浜辺に現れた。肉を得るために桶を手にしていたが、邑人らは血まみれで剣を振るう璽師を目の当たりにすることになった。玖廬は、死んだ璽師が祟り神になって鯨を傷付けていると思ったほどだ。

「璽師様だ」

「璽師様が生きておられる」

男たちは浜に降りると跪いた。

もはや女として蔑む男はいない。那岐邑の誰が、一艘の小舟で鯨を狩ることができるだろう。海に出れば百戦錬磨の漁民が、血に汚れた璽師を海様以上のものと認めた。

璽師が男たちを一瞥する。

「桶を」

玖廬が桶を差し出した。鯨の臓物から朱璽に使う肺腑と胆石を取り出し、無造作に桶へと入れる。異臭が漂い、璽師の身体も今にも崩れ落ちそうだったが、朝の世界に凝縮された染みは鯨の死骸よりも確かなものだった。

目的のものを手に入れた璽師は、一時目を閉じ、そして那岐邑への道に戻ろうとした。

「璽師様、鯨は」

「食え」

と、言い残す。

だが、璽師を呼び止める男がいた。

古瀬丸の父だ。

「丸、丸はどうした」

父は酔いに絡められた足取りで璽師へと向かっていった。酔っているのではなく、酒がまだ残っているのだろう。目と耳は浜辺に横たわる鯨と波音を確かに捉えていた。目と耳が、古瀬丸を探し出せないと言鳴り続けているように、取り乱している。

壘師は、父を路傍の小石ほどのものとしか見ていなかった。

「古瀬丸は死んだ」

「何を」

「構うまい。相応の対価は払ったのだから。金子で得た酒で、昨日はさぞ愉快地に酔えたことだろう。羨ましいことだ。凡夫であっても君子と変わらぬ忠孝を貫くのが、親に対する子の務めだから」

殺してやる。古瀬丸の父は叫んだ。玖廬が止めようとしたが、それよりも早く父の両手が壘師に伸びていた。だが、殺意を実行に移すはるか手前で、壘師の左腕が父の腹部を抉る。拳が胃を痛打し、昨日の酒が口から逆流した。

腐った臭いが、地面に倒れた父の顔を汚す。

情けない男だ。壘師は鼻で笑うのも惜しいという表情で一瞥する。そして立ち去ろうとしたが、父の手が黒衣の裾を掴んだ。

「丸を返せ」

「その思いやる心が昨日までにあったなら、古瀬丸も死なずにすんだらうに」

壘師は吐き捨てるように言い、裾を引いた。得難きものの価値を失ってから見出すのと、慰める言葉もないほどの愚か者だ。古瀬丸がどれほど血の繋がりに重きを置いていたのかを、死んで確かめたいのか。壘師の父を見る目は不機嫌さに満ちていた。子は親を選べないというが、古瀬丸があまりに不憫で、愚かさを剣で突きたくなる。

玖廬は、古瀬丸の父が殺されると思い、海へと視線を逸らした。

その時、玖廬は波間の影に、意図せず叫んだ。

「鯨だ」

浜辺のすぐ手前を小さな鯨が泳いでいた。その鯨の背に、古瀬丸が覆い被さっている。

「鯨だ」

「古瀬丸を助けておる」

玖廬と男たちは我先にと海へと飛びこんでいった。鯨の子が人の子を浜へ送り届けようとしているのだ。玖廬らは鯨の元に辿り着くと、背中から古瀬丸を受け取った。古瀬丸は意識を失っていたが、規則正しい呼吸をしている。生きている、と玖廬が言い、男たちが叫んだ。

「丸、丸よ」

父が喘ぐように名を呼びながら、海へと這った。千鳥足が少しずつ確かなものになり、海に飛び込むときには、漁師の姿になっていた。

父が古瀬丸を抱きかかえる。

古瀬丸が小さく「とと」と言った。意識が醒めても、古瀬丸は自分が父に抱きかかえられているのを、夢のように感じていた。大鯨が舟を壊し、海に落とされたとき、万に一つも助かる術はないと古瀬丸は思ったから、今この海の出来事が理解できないのだ。

ただ、生の実感が涙になって溢れ出た。

「とと、ととなのか」

「おう、おう。丸よ、もう放さんぞ」

「とと、酒はもう飲まないで」

「おう、おう。もう飲まないぞ」

砂砂利の白波に濡れるのもかまわず、父は強く古瀬丸を抱擁した。邑の者も皆、その姿に涙ぐんでいる。鯨を殺すことではなく、鯨に助けられることで、親子は愛情を取り戻した。小鯨が悲しげに鳴く。親を想う子の心に人も鯨もないと、誰もが思った。

璽師も。

璽師は一人、古瀬丸と父を眺めていた。

今より、那岐邑は那岐邑の道を再び歩むだろう。去るべき土地の民草に心を動かされはしない、と璽師は小さく呟いたが、冷徹な女の肩が震えて顔を隠すのが精一杯だった。古瀬丸の生還を喜び、親子の情を恥じつつ、璽師は那岐邑へと戻った。

住居に入り、甕に溜めた水で血まみれの顔を洗う。

その時、璽師は水鏡に映る顔を見た。

「古瀬丸」

頬を伝う雫が、波紋を作る。泣いていると、璽師の女の部分だけは、知っていた。

末の世まで那岐邑で語られるだろう一日は、そのまま終わり、皆は大鯨の肉を食べた。

固い肉は飲み下すのが難しい。

次も、その次の日も、小鯨は浅瀬に留まっていた。大鯨の死骸から離れようとしないう小鯨を思いながら、肉を食べるのは後ろめたくある。それを綺麗事だと割り切る者もいたが、古瀬丸は違った。今日も海へ行き、浅瀬に浮く小鯨と合う。

小鯨は衰弱していた。

「ごめん」

古瀬丸は何もできない自分に罪悪感を覚えていた。無理と知りつつも、助けられたように、助けたい。

その時、璽師が現れた。

「別れを告げに来た」

緩やかな風に璽師の声が掠れる。

「都府へ帰るのか」

「そうだ」

「そうか」

古瀬丸は悲しげに俯く。

やがて、意を決したように璽師を見た。

「母は酒に酔った父に殴られて、そのまま死んだ。何も出来ずに見ていた。いつも死ぬのを見ている。璽師様が殺した男も、あの鯨もきっと。もう殺すのは見たくないと思った。そうしたら昔の父が戻ってきた。あの鯨を見ていたら、母も戻ってくればいいのと思う」

「古瀬丸」

「璽師様、母になってくれ」

それが無理な願いであっても、璽師は古瀬丸に報いなければならないという思いがあった。古瀬丸は自らの力で父を取り戻したのだ。璽師は女の表情を作ると、黒衣から胸をはだけさせた。左腕で抱き寄せると、古瀬丸の口が女の乳首を含んだ。

母の味がする、と古瀬丸は呟いた。そうか、と璽師は目を閉じて、古瀬丸の息と舌を感じた。次の日、小鯨は死んだ。浜に打ち上げられた小鯨を、璽師は見なかった。

浜辺に揚がった鯨の親子は那岐邑の者たちで切り分けられ、骨は新たに建てられた海津屋に祀られることになった。現代では僅かにしか残存していないが、「鯨社」と呼ばれる祠が各地の漁村にあったという。おそらく璽師と鯨を祀った海津屋が鯨社と呼ばれるようになったのだろう。璽師は鯨の臓腑を得た後、衛士の輿に乗せられて都府へと帰った。それからほどなくして壬申の乱が起こり、律令制度が整うと、璽師は官僚機構に組み込まれて歴史から姿を消した。

璽師の女のその後は、どの史書にも記されていない。